

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 竹内けん

挿絵 浮月たく



登場人物紹介

Characters

エヴァリン

魔法の大斧を扱う、お転婆姫。
「飛竜丸」船長にして、リカルドのフィアンセ。



ロゼ

リカルドの配下、スカーレットの腹心にして愛人。参謀としてリカルドに随行する。



ヴァネッサ

カルロッタ王国の女性将軍。
女だてらに海軍を率いる。

リカルド

エトルリア王国の第四王子。
海軍で指揮を執りつつ、翡翠海の平定を夢見る少年。



スカーレット

表向きは商船の船長だが、
実は海の義賊の頭領。リカ
ルドの部下。

イシス

リカルドの部下にして、船長。
クールで有能な将軍。



マリオン、 マーサ、 ジミー

リカルドの愛人にして、
有能な部下。リカルドの
船「海賊王」に乗船する。

第一章

処女航海

007

第二章

海上都市ブラキア

043

第三章

幽霊船は何処

080

第四章

毘

118

第五章

海竜神の娘

157

第六章

密約

205

「スカーレット、場所柄をわきまえよ。おまえというやつは所構わず発情しおって恥ずかしくないのかっ！」

イシスの怖い声など聞き流し、スカーレットは唇を割って中に入ってくる。

前歯を舐められ、歯茎を舐められて、そっと顎に手を添えて口を開くことを促してきた。甘い快感に逆らえず少年が口を開くと、今度はズボリと入ってきた舌が、上顎を舐める。
「はう……」

上顎の縫い目を舐められる快感に、リカルドは震え、次の瞬間には舌を絡め取られていた。

「んっ……ん、むんん……ちゅぷ♪」

スカーレットの巧みな舌使いに翻弄されたりリカルドは、イシスのことが気になって視線を向けた。

赤面して怒ったような難しい表情のイシスが、恨めしげな顔でこちらを睨んでいる。

声をかけようとしてはやめ、白いスラックスに包まれた膝を合わせて、切なげにモゾモゾとさせているさまは、おそろくその脳裏で、女としての欲望と矜持^{きようじ}がせめぎあっているのだろう。

（かわいいよなあ、イシスって……）

イシスが嫉妬してくれている、ということ察してリカルドは嬉しくなる。

リカルドは、この元上司である女船長をとっても尊敬していた。しかし、性の経験は自

分のほうがはるかに上回ってしまったという自覚がある。

真面目すぎるがゆえに性に不慣れなのだ。しかし、ひとつきつかけを与えてやれば、たちまち牝としての本性があらわとなることも知っていた。

（イシスもこっちに來て……）

赤毛の女海賊の強靱な舌に夢中になって自らの舌を絡ませながらリカルドが目で呼びかけると、以心伝心で通じたようである。

頬を染めたイシスは虚ろな表情でふらふらと歩み寄り、スカーレットとリカルドの間に強引に割り込んだ。そして、自らも唇を押しつけてきた。

「うむ、あむ、ぴちゅ……びしゅ……」

嫉妬を抑えられなくなったのだろう。かなり強引な接吻だ。

リカルドの口内に二人のお姉様の舌が競いあうように入り、舐め穿る。

（もう……イシスもスカーレットも、ぼくの大事な女性なんだから、もう少し仲良くしてくれればいいんだけどなあ）

リカルドが舌を差し出すと、二匹の牝豹は競うようにしてペロペロと舐めしやぶった。

チュパチュパチュパ……。

熱い唾液がリカルドの口内に溢れ返り、少年はお姉様たちのミックスジュースを喉に流し込んだ。

「ん、ふうん……ふん……」

さらにイシスはもう我慢できないといった様子で、リカルドの右太腿に跨ると、自らの股間を、まるで騎乗位でも楽しんでむかのように押しつけてきた。

（まったくイシスってば、普段はお堅いんだけど、こうやって一度エッチモードに入っちゃうとスカーレットに負けない淫乱お姉様に変身するんだよねあ）

スカーレットもまた、イシスに負けじと、同じようにリカルドの左太腿を跨ぐと自らの股間を前後にこすりつけてくる。

両太腿にお姉様の重みを感じながら、リカルドの手が自然と左右の美女の胸元へ伸びていった。

「ふうん♪」

黒いコルセットと白いブラウスという衣服の上からもわかる柔らかい感触。乳房を驚掴みにされたお姉様たちは、熱い鼻息を漏らす。

スカーレットの乳房のほうが大きいが、イシスの標準的な大きさの乳房が落ちるわけではない。

（くう……イシスもスカーレットも相変わらずいいおっぱいだな。でも、やっぱり生で思いつきり楽しみたいよねあ）

肌を幾度も合わせた経験のあるお姉様たちは、意中の少年のちよつとした仕草から、その思いを察したのだろう。競うように自らの胸元をはだけた。

スカーレットは鞆革なめしがわのビスチェの胸元をペロリと捲り、イシスは練絹のブラウスのボタ

ンを外す。

そして、貪るような接吻をやめると、それぞれ自慢の乳房を押しつけてきた。

「うふふ、そろそろおっぱい食べたくなっちゃったのかな？」

「わたしのおっぱいも食べてください！」

左太腿にスカーレット、右太腿にイシスが乗り、二人は乳房をリカルドの顔面に押しつける。

（あはっ、おっぱいだ。やっぱり大人のおっぱいっていいな。大きくて温かくて柔らかくて。この質感はやっぱり大人ならではのだよなあ）

リカルドが毎日のように楽しんでる三人娘の中でも、ジミーは童顔のわりに巨乳とっていい大きな乳房をしていた。しかし、やっぱり大人のおっぱいを楽しんでいると、ジミーの乳房は大きいだけで子供なのだと思い知らされる。充実感が違う。

「はあ、はあ、あん」

すっかりスケベ少年の本性をあらわにしたリカルドが、お姉様たちのムッチリとした乳房を顔いっぱい楽しんで酔いしれているときである。

何気なさを装いつつスカーレットがとんでもない爆弾を投げてきた。

「そういえば聞いたわよ。我が主君は、もうあのヴァネッサを落としたそうじゃないか？」
イシスの視線が一瞬厳しくなる。まるで浮気が見つかったかのような後ろめたさを感じたりカルドは、若干、声を裏返す。



「え、どうして……？」

「あの女狐、我が主君の部屋から帰ったあと、まるで魂が抜けたみたいにポーとしていたかと思うと、突然デレデレと締まりのない顔になったりと、情緒不安定な一日を過ごしたらしいわ。鬼の霍乱^{かくらん}としてブラキアの兵士たちの間では伝説の一日となったらしいわよ」

「そ、そうなんですか？」

素知らぬ顔をしたリカルドだが、自分が抱いた女がそこまで喜んでくれたのだと思うとやっぱ嬉しい。

やに下がった顔をしているリカルドを、イシスが叱責する。

「あんな半端な女にお情けを授けるなどもつたいない」

「で、でも……イシスは評価していないみたいだけど、ヴァネッサってなかなかの人物だよ。ぼくは……あのお姉さんと親交がもって幸運だったと思うけどなあ」

大好きなお姉様たちの乳房を堪能しつつ、別のお姉様の抱き心地のよさを反芻するという罰当たりなりカルドに、イシスが雷を落とす。

「殿下は女に甘すぎますっ！　いくら漁色家の殿下でも、やっていい女と悪い女ぐらいの区別はつけてください」

「まあ、我が主君は、やらせてくれる女はみんないい人ってことになってしまいうからな」
スカレットの評に、イシスまで困ったものだ、と言いたげに頷いたものだから、リカルドはちよつとムツとする。

「それじゃ、まるでぼくが無節操な女好きみたいじゃないか」

「あれ、自覚なかったの？」

スカーレットに揶揄されるように乳首で頬を小突かれたリカルドは、小さく「わかってるけど」と言い訳がましい顔をする。

イシスが小さく溜息をつくとき、まるでお仕置きというかの如く、さらに激しく乳房を押しつけてきた。

「まあ、いまさら殿下がどこで浮名を流そうと驚きませんが、肝心のエヴァリン殿下とはいかがですか？」

「えっ!? エヴァリンって、もちろんなにもないよ」

あたりまえだという顔をして応じるリカルドに、イシスの表情がさらに厳しくなる。

「だって政略結婚だし。急ぐ必要はないよ。エヴァリンだって、あの性格だし、きつとぼく以外のいい男がいると思うんだ」

乳房で競うようにリカルドの顔を弄んでいたスカーレットとイシスが、同時に呆れたという表情を浮かべた。

（え、ぼく変なこと言ったかな？）

戸惑うリカルドに、イシスがしみじみと語る。

「殿下は女性経験こそ豊富でも、ほんとうに女心がわかっていないお方なんですわね」

「そんな、ぼくはいつもイシスやスカーレット、それにぼくの抱いた女たちみんなの幸せ

を考えているよ」

ムキになって反論するリカルドを、イシスは優しく諭す。

「それはありがとうございます。しかし、あんなあからさまな処女娘を見て、どうして他に好きな男がいるなんて思えるのですか？」

「……」

イシスに男女の機微を説かれるとは思わなかったリカルドは、二の句が継げずにいる。スカーレットがニヤニヤと笑って助け舟を出す。

「ああいう態度は、男の気を引いていると言うよな。あとは我が主君から迫って、今まであたしたちの身体から習得したテクニクを使って、イかせてしまえばいい」

「女には男に身体を求められてこそ、愛されていると自覚できる部分がありますからね」
いつも喧嘩ばかりしているイシスとスカーレットが、なぜか意気投合して頷きあっている。

なんか悔しくなったリカルドは合計四つの乳房を左右から纏めると、その先端を彩る四つの乳首を同時に口に含んだ。

「あぁんー♪」

チュウチュウと乳首を纏め吸いにされたお姉様二人は、どうやらリカルドの誤魔化しに乗ってくれたようである。

乳首をコリッコリッに勃起させたイシスは右手で、乳首をぶつくりと勃起させたスカー

レットは左手で少年の頭を抱えながら、その太腿で切なげに腰をコネコネと前後させた。そして、二人はまるで計ったかのように同時に少年の股間をまさぐり、ズボンの中からいきり立つ逸物を取り出す。

イシスは左手でスカーレットは右手で、肉袋を揉んだり、肉筒を扱いたりしてきた。

「あうっ……」

活きのいい男根からはたちまちトクトクトクと先走りの液体が溢れ出し、リカルドはたまらず顔面で楽しむ乳房から一度顔をあげて喘いでしまった。

「うふふふ……」

まさに年上の女らしい笑みを浮かべたスカーレットが、悶える愛しい主君の耳元に囁く。「まあ、エヴァリン王女のことはおいおいということ……。そろそろあたしたちにこの素敵なおちゃんを入れてくれない♪」

「え、いいの……」

お姉様たちに説教されているという意識があつたリカルドが、意外そうな顔をする、端正な顔を紅潮させたイシスが、苦笑まじりに反対の耳元から囁く。

「いけないはずがありません。わたしは殿下の女なのですから」

リカルドはぱつと顔を輝かせた。

「うん、イシスもスカーレットもぼくの大事な、大好きな女だよ」

リカルドの目を見つめながらイシスは優しく頷いた。瞬間、心が通じあつたような気が

して、リカルドの胸を温かいものが流れた。

そんな二人を横目に見ながらスカーレットがまぜつかえす。

「ふん、いつまでも気取った女だね。おまえだつてもうオマ○コグチュグチュでたまらないだろうに」

「わたしは殿下に求められれば身体を差し出すだけで、貴様のように浅ましく求めたりはしない」

またも喧嘩を始めた二人を慌ててリカルドは仲裁する。

「もう喧嘩しないで。じゃ、まずスカーレットはそのテーブルに仰向けになって。その上にイシスがうつ伏せになってよ」

リカルドの指示に従って、テーブルの上に仰向けになったスカーレットは豪快に足を広げ、その上に腹這いに乗ったイシスがお尻を差し出す。

「こ、こうですか？」

「うん、いい感じ」

不安そうに後ろを窺ってくるイシスに、リカルドは好色な舌なめずりをしながら頷いた。なにせリカルドの視界には、白いズボンに包まれたイシスの下半身と、赤い巻きスカートに包まれたスカーレットの下半身が二つ並んでいるのだ。

（うー……なんて贅沢な眺めなんだ）

リカルドが見惚れていると、不意にスカーレットが嬌声をあげた。

「あはっ♪ 女同士、乳首が擦れると気持ちいい♪」

「バカ感じるな。わたしはおまえなど感じさせてやるつもりはないっ！」

「もう相変わらずつれないわね。あんただってこうやって乳首が擦れて気持ちいいでしょ」
スカーレットの腕がイシスの背中を抱いて、グリグリと抱き締めると、イシスもやっぱり感じてしまうのか、嬌声を漏らした。

（二人とも乳首を擦りあわせるだけで感じちゃっているってことは、相当高まっているな）
お姉様たちのレズっぽい痴態に生唾を飲んだりカルドは、まずはイシスの白い足通しを下ろすと、さらに中にあった白いTバックショーツをも脱がしてしまう。

「ああ……」

小さなショーツの股座と、その女体の密着面から銀色の糸が引き、イシスは羞恥の声を漏らす。

次に赤い巻きスカートの中の黒いセクシーショーツに手をかける。スカーレットは心得たもので、両足を揃えて差し出してくれた。いつきにショーツを引き抜くと、再び大開脚になる。

黒い陰毛と赤い陰毛に覆われた陰唇は、上下とも充分に潤っていた。

「我が主君、早くちょうだい」

「いえ殿下、わたしのほうにさきをお願いします」

互いの乳房を押しつけあうスカーレットとイシスは淫らに腰をくねらせながら誘ってき

た。

考えてみればリカルドが海賊征伐の航海に出てからというもの、二人とも禁欲生活をしていたのだ。女盛りの身体が餓えていたのだらう。

対するリカルドのほうは、船中生活の間にも、マリオン、マーサ、ジミー、さらにはヴァネッサたちと充実した性生活を送っていたわけで、それなりに余裕があった。

（うふふ、二人ともぼくの女なんだし、ぼくがたつぷりと気持ちよくしてあげないと……）
淫らなお姉様たちを前に興奮を隠しきれないリカルドは舌なめずりをしつつ、二人の陰唇に顔を近づけると、まずはじつくりと視姦する。

（お尻やおっぱいが大きいからか、オマ○コもスカレットのほうが大きいよなあ）

それから両手を伸ばし、左右の人差し指でイシスの陰唇を、左右の親指でスカレットの陰唇を開いた。

「ああ……そ、そんな……ところを……見比べるだなんて……」

イシスが羞恥に悶える声を漏らし、スカレットもさすがに恥ずかしげに震えている。

「イシスもスカレットも、相変わらず綺麗なオマ○コだから見ないともったいないよ」

スカレットはローズピンク、イシスはサーモンピンクの媚肉だ。二つとも贅肉がヒクヒクと痙攣していて、たつぷりとシロップがかかっている。

鼻を近づけて匂いを楽しむと、二つとも大好きな潮の香りがした。

（今日は、スカレットのオマ○コのほうが匂いきついな）

匂いを楽しんだあとはいよいよ舌を伸ばす。いや、もはや自らの中の淫獣を抑えかねたスケベ少年は、上下の陰唇にむしゃぶりついた。

「はあ、ああ、ああ……♪」

「あん、いきなり……そこ……ですかぁ♪」

スカーレットとイシスは、まるで一对の獣のように甲高い嬌声をあげた。

リカルドの舌によつて、上下の陰唇から溢れる蜜が混じりあい、塗りたくられる。

お姉様たちは少しでも少年の舌を味わいたいと、自ら腰をくねらせ陰唇を押しつけてくる。さらには少年の舌先が互いの陰唇の間を移動する時間も惜しいとばかりに、しっかりと抱きあい、陰唇を擦りあわせるほどに近づけてしまう。

いつしか俗に言う「貝あわせ」のような状態になってしまった。

悪戯心を起こしたリカルドは、お姉様たちの陰核をむき出してやる。すると飛び出した赤真珠たちが触れあつてしまった。

「ああああ……♪」

ビリビリビリと電流でも流れたかのように二体の牝は震えた。

「あ、ああ、や、やめよ。そんなに貴様の、そこをこすりつけるな……」

「なにを言つてやがる。上になつてるのはおまえのほうだぞ。おまえが積極的に押しつけてきているんだよ、ああ♪」

一度知つてしまつたら、やめられない快感なのだろうか。イシスとスカーレットの陰唇

は吸いつくようにぴったりとくっついてしまった。

リカルドのほうはその間に顔を突っ込み、舌はもちろん、鼻の頭まで使ってお姉様たちの媚肉の違いを存分に楽しみつつ、大陰唇から陰核まで隅なくしっかり舐め回した。

「ああ、あああんっ♪」

牝獣たちはもはやたまらないといった様子で抱きあうと、互いの濡れそぼった陰唇と、しこり立った乳首を擦りあわせる。

そして、二つの陰核を同時に少年の口内に含まれたとき、辺り憚らぬ嬌声を張り上げながら、ギュッと強く抱きあった。

「ああああああっ」

プシャッと二種類の愛液が舞い、リカルドの顔面に浴びせられた。

（そろそろいいかな？）

身を起こし手の甲で口元を拭ったリカルドは、いよいよ臍まで振り返った男根を構えた。男の挿入の意思を察した女たちは、淫汗に濡れ輝くお尻を翳して口々に懇願する。

「あ、早く……あたしの中に……」

「こ、これ以上焦らされてはわたし……」

二つの膣口がまるで魚の口のようにヒクヒクと物欲しそうに開閉している。亀頭を添えただけで、すぼりと呑み込まれてしまいそうだ。

どちらに先に入れても角が立つ。そこでリカルドは策を弄した。

「はう……、はう……はう……」

ロゼはまるで子犬のような喘ぎ声を漏らす。

（小柄だけど、しっかり大人のオマ○コだ。美味しい）

酸っぱくてしょっぱい、それでいて程よい苦味のある陰唇の味を楽しんだりリカルドは、
ほどほどのところで顔をあげた。

「ロゼさん。もう我慢ができません。入れていいですか？」

「う、うん……」

陶然とした表情のロゼは言葉少なく頷いた。しかし、リカルドがそのまま後背位で挿入しようとすると待ったをかけた。

「これはその女を尋問するための手段です。だから、見せつけなくては無意味になってしまふ」

「そ、そうだね」

自分たちの情事を洩垂らして見つめる痴女を、ロゼは顎で指し示した。

リカルドと視線が合ったヴァネッサは喘ぐように懇願してくる。

「殿下、わ、わたしに頂戴……殿下のおちんちん、先にわたしに頂戴」

蛸に捕らえられ、三人娘に全身を嬲られているお姉様は、欲情しきった表情を浮かべ、全身から淫ら汗を噴出していた。さらにカクンカクンと前後する腰使いがなんとも卑猥であり、哀れだった。

「ダ、ダメですよ。ヴァネッサさんが知っていることを洗いざらい教えてくれるまでは、オチンチンはお預けです」

無様なまでに発情している牝を、さらに煽ることに興奮しながらリカルドは、その場で胡坐をかいた。猛り狂う逸物が、拘束されているヴァネッサの鼻先にくる。

若い逸物は一度射精したくらいでは、まったく萎えることを知らないが、先に一度射精しただけに、濃厚な牝の匂いを放っている。

「あ、ああ……」

まるで砂漠で遭難した旅人が、水を求めるかの如く喘ぐお姉様の鼻先で、ロゼはリカルドに背を向けて立った。リカルドが腰を掴んでやると、そのままゆっくりと腰を下ろしてくる。

「あああ……」

涎を垂らす美女の鼻先で、いきり立つ逸物に、小柄な陰唇が添えられた。そして、ゆっくりと沈んでいく。

いわゆる背面座位での挿入である。

「お、大きい……!？」

ロゼが目を開く。

「そりゃ、スカーレットの指に比べたら大きいだろうけど、ぼくのオチンチンなんて標準サイズだと思うよ」

優しく諭したりカルドだが、口調ほどに余裕があるわけではなかった。

（狭い。まるで処女みたい……。まさかはじめてってことはないと思うんだけど、男ははじめてなのかなあ……）

ズブズブと沈んでいった逸物がやがて止まる。

「くうっ、お、奥に届いているう……」

小柄な体軀だけに、膣洞も短かったらしい。亀頭部が子宮口にがちり嵌まってしまったようだ。

ロゼの様子を確かめようとその顔を覗き込むと、目尻に涙が溜まっていた。

「え！ 痛いのか？ 大丈夫？」

「い、いいえ……気持ちいい……ですう」

驚き慌てたりカルドに、ロゼは首を振るう。そのさまにリカルドは少し安堵する。

（それにしてもロゼさんのオマ○コって、ほんと処女みたいに狭いや。少し待って、まずはロゼさんを慣らさないと。それから男のよさを教えてあげるぞ……）

真性レズな女性とエッチしているのだ。これを機会に男の味を教え込みたいと思ってしまうのは、男として自然な欲求であろう。

「そう、よかったあ。たまには、男の、おちんちんも……いいものでしょ？」

「う、うん……オマ○コがいっぱいに広げられて、奥の奥までみっちり詰まっている」
男根の大きさに戸惑っている少女に対する掘削運動をひとまず我慢したりカルドは、両

手を前に回して、ロゼの古風なドレスの胸元を寛がせた。

中から現れたブラジャーはシンプルで、まるで子供用みたいだ。そのブラジャーを上部にたくし上げる。

「うわ、ほんと小さい」

思わずこぼしたマーサの後頭部を、マリオンがはたいた。

「あんただって、それほど大きくないでしょ」

「二人とも喧嘩しない。ぼくはおっぱいの大小なんて気にしないよ。大きいおっぱいも好きだし、小さいおっぱいも好きだから」

要するに魅力的な女性の乳房は、どれも素敵だ、というのがリカルドの信念である。

リカルドは両手を前に回して小柄な乳首を両方の指先で摘んで、コネコネと遊ぶ。

「はあ、はあ、ふあー」

男根を入れられながら乳首を責められたロゼの吐息がどんどん甘く熱いものになっていく。

氣をよくしたりリカルドは右手をすつと下半身に下ろしていき、男女の結合部をまさぐる。そして、小柄な体躯のわりには大きめな陰核を捕らえた。

「はうう♪」

ロゼは仰け反る。膣壁がヒクヒクと痙攣した。

そうやってじつくりと、男に慣れてない少女の膣口に、男根を馴染ませていく。

「ロゼさん、そろそろ動いていいですか？」

「はあ、はう、うん……」

喘ぎながらも、ロゼはこくりと頷く。

そこでリカルドは、ロゼの両膝の裏に手をやって、ズッコズッコと上下させた。小柄な体躯の娘にだからこそできる力業である。

「はあ……、はう……、ひう……。お、奥までズンズンって、はう、大きい。……オマ○コがまくれるう」

女同士では決して味わえない肉感というやつであろう。

ロゼが感じてくれるのが嬉しくて、リカルドの動きは少しずつ豪快になっていく。

「はあ、はあ、はあ……」

ロゼの喘ぎ声がリズムカルになっていき、それを見学している四人の女たちの喉が鳴った。

その場にいる見学者四人は、みな男の味、すなわちリカルドの男根の味を知っている女たちである。

愛しい男の逸物が、自分の体内を出入りしている感覚を容易に思い出してしまったのだろう。お尻がクネクネと動いている。

生殺しにされているヴァネッサはもちろん、マリオン、マーサ、ジミーの三人組も羨ましそうに、男女の交わりを見つめ、なんとも切なそうな表情だ。



もう我慢がならないと言いたげなエヴァリンは、バネ仕掛けのように立ち上がると、空になったハンモックを指し示した。

「こ、この変態男。このうえで横になりなさい！」

「は、はいっ！」

なんだかわからないが、今のエヴァリンに逆らうのは得策ではないと判断したりカルドは、驚きながらも唯々諸々とハンモックに仰向けになる。

「ふん」

不機嫌そうに鼻で笑ったエヴァリンは、精液と愛液でドロドロになっている逸物に顔を近づけるとクンクンと鼻を鳴らして匂いを嗅ぎ、直後に顔を顰めた。

「あなたのこれ、すごい生臭いわ」

「ごめん……」

プリプリと怒りながらも、これからどうしたものか、とエヴァリンが決めかねていると、不意にハンモックの反対側から、おかつば頭のロゼが顔を出し、その半萎えの逸物をカプツと咥えた。

「あっ……」

不意打ちを食らったリカルドは身悶える。射精直後の逸物は触れられたくないものだが、少女の口内でたちまちのうちに男根は頭をもたげていく。

「ちょっと、あなたね。いきなりなに？ なに、そんな汚いもの舐めているのよ」

「汚くない。それにこうするとリカルドさま歡ぶ」

まるで鳶に油揚げをさらわれたようなエヴァリンは動転して叫ぶ。ロゼはいったん愛液と精液でドロドロになってゐる逸物から口を離し、愛しげに見つめながら答えた。

それから再び美味しそうに舐める。

「……」

エヴァリンは絶句し、しばしロゼの行為を苛立たしげに見つめたあと、リカルドの顔を睨みつけてきた。

「あんた、前にわたしにも、ここを舐めるように言ってきたわよね」

「……うん」

「いまも舐めて欲しいの？」

「そりゃ、まあ……」

リカルドが返事を濁していると、エヴァリンはジロリとした目でリカルドをしばし睨んだあと、大きく溜息をついた。

「仕方ないわね。わたしは夫を立てる女なのよ」

恐ろしいまでに似合わない台詞を言ったエヴァリンは、ロゼが無表情に舐める逸物に顔を近づけた。そして、躊躇いがちに懇願する。

「あ、あの……わ、わたしにも少し舐めさせてもらえるかしら？」

「ふむ……」

無表情な中にも仕方がないと言いたげに頷いたロゼは、素直に逸物の半分を分け与える。半萎えの逸物を見下ろしたエヴァリンは、瑞々しい珊瑚のような唇から恐る恐るピンク色の舌を伸ばすと、亀頭部をペロリとひと舐めした。その自信なさげな仕草が、妙にかわいい。

「……っ!？」

眉を顰めたエヴァリンだが、目の前にいるロゼの行為を見よう見真似で、半萎えの逸物の側面を舐めあげる。

ピチャピチャピチャ……。

ハンモックに横になるリカルドの右側からロゼ、左側からエヴァリンが、まるで合わせ鏡のように亀頭部を舐め回す。たちまち逸物は隆起していく。

「うむ、んむ……なんでかしら? ……凄い臭いの、美味しい♪」

初体験のとき、男根を汚いと言って口ではしてくれなかったエヴァリンだが、今はそんなことを言っていられないらしい。

まるで酒にでも酔っているかのように頬を染めた王女様は、潤んだ瞳を寄り目にさせながら、陶然とした表情を浮かべ、ロゼと競い合って舌を動かしている。精液と愛液と唾液の混じりあった粘液が糸を引き、逸物と少女たちの口唇を繋いでいた。

(はぁー気持ちいい。あのプライドの高いエヴァがこんなに美味しそうにおちんちんをしやぶる日が来ようとは、ちよつと予想できなかったなあ)

気の強い幼馴染みが、自分の男根を夢中になって舐めしゃぶっている光景というのは、なんとも幸せな気分になれる。

いつしか二人の少女は、亀頭部を挟んで接吻し、その口内でエラの部分を熱い舌で擦りたてた。

唾液がダラダラと流れて、ヴァネッサの愛液とリカルドの精液ですでにドロドロになっていた逸物が、さらにドロドロになってしまふ。

猫のように表情豊かな美少女と、人形のように表情乏しい美少女によるダブルフェラを堪能していると、もうひとつの影が立った。

「うふふ……エヴァリン殿下つてば、すっかり男の味に目覚めちゃったみたいね」

いつの間にか復活したヴァネッサが揶揄するように、エヴァリンの顔を覗き込む。

「べ、別にいいでしょ。このヤリチンを独占しようとは思わないけど、わたしが正室になるんだから、第一の所有権はわたしにあるのよ」

離すまいとするかのように、エヴァリンは男根の根元を握り締めながら叫ぶ。

そんな子供じみた態度に、ヴァネッサは微笑を浮かべる。

「うふふ、ウブな姫様に、大人の女のセックステクニクつてやつを教えてあげるわ」

一度薄い唇の周りを舐めたヴァネッサは、すでに露出していたさすがは大人の女と思わせる巨乳を見せつけるように両手に取った。

そして、微乳のロゼを押しのと、男根を巨大な乳房の狭間に挟んだ。

「はう……」

柔らかい乳房に包まれた男根を見下ろし、リカルドは思わず歓喜の声を漏らす。

「うふふ、男ってこういうことされると歡ぶのよねえ」

小娘にはできないでしょ、と小馬鹿にした表情を浮かべたヴァネッサは、乳の谷間に挟んだ男根をユサユサと扱いた。

乳房の表面は、触れた瞬間はひんやりとしていたが、すぐに男根の熱と同化して、燃えるように熱くなる。

この淫らな光景に圧倒されたエヴァリンは半歩退いたが、すぐさま意地になって叫んだ。

「わ、わたしだってそれぐらいできるわよ」

薄緑のドレスの肩紐を外したエヴァリンは、まるで真珠のように白く輝く乳房を露出させた。

さすがにヴァネッサの大きさには及ばないが、年齢的に考えれば充分に巨乳といってい乳房だ。

前方に船先のように飛び出す硬い美乳はまったく垂れておらず、頂を飾るヴァージンピンの乳首は、小生意気なまでにツンツと勃起していた。

「これで挟めばいいわけでしょ。簡単なことじゃない」

両乳を手を取ったエヴァリンは、リカルドの逸物を挟むヴァネッサとは反対側から強引に押しつけた。うっすらと汗ばんだ肌が、赤黒い逸物に触れる。

「へえ……張りあおうっていうの♪」

ヴァネッサは愉快そうに目を細める。

「あたりまえじゃない。わたしはこいつの正室なんだから、当然、わたしが一番愛される権利があるのよ」

意固地になっているエヴァリンは夢中になって乳房を動かし、ヴァネッサもまた巨乳を生かしてモミモミと男根を揉んだ。

柔乳と硬乳が押しあつてのダブルパイズリ。唾液と精液と愛液でドロドロになっている逸物が、ヌチャヌチャと卑猥な音を立てながら、百戦錬磨の総督と男勝りのお姫様の胸の谷間を踊る。

（うわあ、エッチな眺めだっ）

スベスベとした絹よりもさらに滑らかな女の温かい柔肌で包まれる快感と、女の象徴である乳房で奉仕してもらえるとという精神的な視覚効果で、少年は恍惚となってしまう。

（あれ、ロゼさんなにするつもりだろう）

ロゼがハンモックに寝ているリカルドの足の間から、顔を近づけてきた。

二十歳近くになるロゼだが、乳房はかなり小さい。このおっぱい責めの中に割り込むには、残念ながら適役ではない。

しかし、リカルドの心配は杞憂だった。ロゼは、合計四つの乳房の間から飛び出した亀頭の裏側を。ペロペロと舐めたのだ。

「はう！」

ゾクゾクとする快感がパンパンに膨れ上がった亀頭から、尾骨まで駆け抜けた。

パイズリをしながら亀頭を舐める女はいる。しかし、ダブルパイズリをしながら亀頭を舐めようとする、互いの頭が邪魔になって難しい。その弱点をロゼが補完してくれたわけだ。

痴女へと堕ちた女総督、真性レズの女海賊、男勝りな王女。いずれもタイプの違う美女美少女が、自分の逸物に群がり、ダブルパイズリをし、亀頭の裏側を舐めている。

女たちの熱い体温の中で、男根はアイスキャンデーのように溶けてしまいそうだった。その上、ハンモックの上でユラユラと揺られているせいで、まるで雲の上に浮かんでいるような陶酔感まであるのだ。

(ああ……極楽だ)

女たちの奉仕活動を見下ろしリカルドが恍惚としていっていると、それまで黙って見学していたマリオンが声をかけてきた。

「リカルドさま、あたしたちも参加していいですか？」

リカルドが返事をする前に、振り返ったエヴァリンが返事をする。

「もちろん、いいわよ。こうなれば愛人が二人だろうが、五人だろうがたいした違いはないわ」

その表情はなにかが吹っきたのか、妙に爽やかだった。

マリオンは歡喜の口笛を吹く。

「ヒュー♪ さすが王女様太っ腹だね」

「優しい奥方様でよかった」

ジミーは安堵したように胸を手で抱く。

「もし嫉妬深くて、愛人は全員死刑なんてことになったらどうしようと思っていたのよ」

マーサも安堵の溜息をつく。

（え、こいつら、そんなこと心配していたのか？）

驚いたリカルドは、寵愛する女たちに慌てて声をかけた。

「大丈夫。ぼくの女はなにがあつたつてぼくが守るから。そういう心配はしなくていいよ」

「そうよ。わたしも、こいつの女好きを責めても、女のほうを責めるほど狭量ではないわ。

あなたたちも協力しなさい。今夜は親睦を深めるためにもこいつを徹底的に絞るわよ」

同調して頷いたエヴァリンは、リカルドの顔を嗜虐的に見下ろして笑った。

「げえっ」

思わず恐怖の悲鳴を漏らしたりリカルドだが、そういう大義名分を出されたのでは反対で
きない。

「ようそろっ！」

マリオン、マーサ、ジミーが歡喜の声を調和させた。どうやら、彼女たちとエヴァリン
は波長が合うようだ。短いやり取りで意気投合してしまった。

三人娘はリカルドの上半身に取りつく、その衣装を脱がす。

結果、リカルドは素っ裸になってハンモックに寝ていることになる。もちろん、逸物の周りではヴァネッサとエヴァリンがダブルパイズリ、先端をロゼが舐めている。

その上で三人娘は、リカルドの胸板にキスをし、舌を這わせ出した。

少年の薄い胸板に三本の唾液の線が引かれていく。

鎖骨や脇腹、乳首や臍を舐められ、さらには両腕を頭上にあげさせられて、腋の下まで舐められる。

「あっ……くっ……くすぐりたいよ。ふあっ……」

女の子たちに身体中を舐められたリカルドは身悶えたが、無論、許してもらえるはずがない。

右の乳首をマーサが、左乳首をジミーが咥えて、まるで女の乳首をしゃぶるように啜った。

「あっ……」

男としては認めたくないが、男も乳首を吸われると感じてしまう。しかし、その快感を認めてしまうことがどうしようもなく恥ずかしい。

逸物について乳首からもまた震えるような快感が全身に波及する。

さらにマリオンが、リカルドに唇を重ねてきた。

「ふぁ……あん……くっ……」



マリオンはリカルドとの接吻に慣れているだけあって、上手だ。濡れた舌が入ってくる
と、リカルドの舌は絡め取られ、上顎の縫い目などをペロペロと舐められる。

（気持ちいい……極楽を超えた極楽ってなんていうんだろう）

全身を美少女と美女に囲まれて、少年は酩酊した。

まるで身体中が性器になり、女たちに弄ばれている気分だ。

桃源郷に遊ぶが如き浮遊感の中、リカルドはもはや我慢というものができなかった。本能の赴くままに、腰をグイッと突き上げる。

「キャ、なにこいつのおちんちん、また大きくなったわよ」

ライバルに負けてならじと逸物を乳房に挟んでいたエヴァリンが驚愕し、その向かいにいるヴァネッサが笑った。

「うふふ、来るわよ。ドピュドピュッて♪」

「え、ええ……」

若き性欲の赴くままに一晩中セックスに興じたことのあるエヴァリンだが、まだまだウブである。

目の前で起こる男根の変化に目を白黒させた。

（あ、もう出る……）

身体中が男根となってしまうたかのような錯覚に陥ったりリカルドは、逸物といわず胸板といわず全身を痙攣させた。

その振動が硬乳と柔乳に包まれた逸物に収縮される。ビクビクビクと痙攣した男根が、太く膨れ上がり、エラが大きく張り出し、先端の穴が広がった。

「……っ！」

息を飲む女たちが見つめる中、射精を促すようにロゼの舌先が、尿道口をペロリと舐める。それが駄目押しとなった。

「うわあああ……!!」

全身を痙攣させながら思いつきり仰け反ったりカルドは、唇を貪るマリオンと接吻を交わしながら、断末魔の叫びとも取れる情けない雄叫びをあげた。

ドビユッ！ ドビユッドビユッ——ッ。

まるで鯨の潮吹きのように白濁の液体が舞い上がった。

勢いよく噴出した精液は、ロゼの顔面はもちろん、ヴァネッサやエヴァリンの胸や顔に浴びせられ、さらにはリカルドの胸や唇を吸っていたマーサ、ジミー、マリオンの顔にまでかかった。

「はあ……はあ……はあ……」

射精を終えて荒い呼吸をするリカルドだが、その逸物は鎮まっではいなかった。いや、鎮めることを許してもらえなかったというのが正しい。

エヴァリンとヴァネッサはダブルパイズリを続けているし、ロゼは亀頭の先端を舐めている。マーサとジミーは乳首を舐めているし、マリオンは接吻をしている。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>